最近5年間のわが教室における痔核手術の遠隔成績

佐 藤 幸 雄 高 田 光 也 大 河 内 正 敏*

I. 緒 言

われわれは、最近5年間に当外科教室で痔核手術を行った患者の遠隔成績を得たので、ここに報告する。

II. 成 績

当外科教室で最近5年間にを行った痔核手術の総数は、105例で、手術々は Whitehead 氏法、Braatz 氏法、Milligan 氏法、Sarafoff 氏法によつた。患者より、回答を得たのは、62例でそのうち Whitehead 氏法を行ったものは14例、Braatz 氏法、Milligan 氏法、Sarafoff 氏法を行ったものは48例である。

それらの遠隔成績を調べると、第1表のごとく

第1表 再発及び排便時の疼痛出血

	Whitehead 氏法 (14 例)		Braatz 氏法 Milligan 氏法 Sarafoff 氏法 (48 例)	
	有	無	有	無
再 発	0	14	12	29
排便時の疼痛	2	9	11	37
排便時の出血	3	9	10	38

第2表 肛門の「しまり」の程度

	Whitehead 氏法 (14例)	Braatz 氏法 Milligan 氏法 Sarafoff 氏法 (48例)
脱肛する	1	2
便意をもよおすと便所 へ行くまでにもらす	1	1
軟便の時我慢するとも らす	4	1
下痢の時のみもらす	7	3
異常なし	3	40

再発および排便時の疼痛出血については、Whitehead 氏法を行ったものには再発例はなく、排便時

の疼痛が軽度にあるものが2例、出血は3例であるが、いずれもときどき紙につく程度のものである。しかし Braatz 氏法、Milligan 氏法、Sarafoff 氏法を行ったものでは、全例の約四分の一に再発、排便時の疼痛、出血を来している。

第2表のごとく、肛門のしまりの程度については、Whitehead 氏法を行ったものには、脱肛すると云うのが一例で、軟便の時や下痢の時のみもらすと云うのが全例の約五分の三にみられる。Braatz 氏法、Milligan 氏法、Sarafoff 氏法を行ったものでは、脱肛するもの2例、下痢の時のみもらすもの3例で、異常のないものが殆んどである。

第3表 粘液や分泌物の排出

	Whitehead 氏法 (14例)	Braatz 氏法 Milligan 氏法 Sarafoff 氏法 (48例)
多量出る	1	1
排便後少し出る	6	10
全然出ない	5	37

第4表 排便の状態

	Whitehead 氏法 (14例)	Braatz 氏法 Milligan 氏法 Sarafoff 氏法 (48例)
便が出にくく下剤浣腸 を要す	1	7
便が多少出にくい	3	15
正 常	8	26

第3表のごとく、粘液や分泌物の排出については、Whitehead 氏法を行ったものには、多量に出るもの1例、排便後に少し出るものが半数にみられる。Braatz 氏法、Milligan 氏法、Sarafoff 氏法を行ったものでは、排便後少し出るものが全例の五分の一にみられ、全然出ないものが殆んどである。

第4表のごとく、排便の状態については、Whitehead 氏法を行ったものには、下剤浣腸を用いねばならないものは1例しかなく、Braatz 氏法、Milli-

* 名古屋市立大学医学部第一外科 (指導: 柴田清人教授)

gan 氏法, Sarafoff 氏法を行つたものでは、便が多少出にくいものが全例の三分の一にみられ、過半数が正常である。

III. 考 按

われわれの教室において、Whitehead 氏手術の適応はあくまで4個以上と云うか、全周に簇生せる痔核を有する患者、および脱肛を伴つたいわゆる重症例にのみ施行して居る。そして軽症痔核手術は原則的に Braatz 氏法, Milligan 氏法, Sarafoff 氏法を行つている。

それで以上の遠隔成績からみると痔核発生の主なる素地をなす部位を切除する Whitehead 氏法に再発例の見られないことは予想されうことであり、後貽症状として肛門狭窄例が過去に比して減少しているのは、抗生剤の使用によつて手術創感染による創哆開が減少し、また Whitehead 氏手術の木村氏変法を実施していることにより、直腸壁縦走筋切断と云う手術操作が縫合に対し減張的に働くためと考えられる。つぎに本法施行症例における肛門閉鎖不全という後貽症は、手術前の状態がすでに括約筋不全の型を来しておるものを

手術適応とする時には起りうることで、手術操作によりさらに括約筋を障害することを嚴重に注意せねばならないとともに、このような症例にはさらに Sphincteroplastik あるいは括約筋縫縮を積極的に検討すべきものと考へている。勿論このような痔核重症例は、Whitehead 氏法以外の手術方法で解決しえないものであることは、他の方法を行つたものにも肛門閉鎖不全を後貽することがあるという事実が示している。Milligan 氏法, Braatz 氏法, Sarafoff 氏法は、痔核剔出術であり、痔核の発生が素因的である以上、再発は予想されうことであり、後貽する肛門狭窄症状が Whitehead 氏法よりむしろ多いことは、興味深いことである。

総 括

痔核手術の成否は、その症例に対する手術々式の適応問題が第一であろうことは周知の事実であるが、重症例とくに脱肛すなわち、括約筋の器質的变化を来しているものには、Whitehead 氏法を行うとともに、さらに肛門閉鎖不全に対する上述の積極的対策を検討すべきものとする。

Long term Result of hemorrhoidectomy in the five Years in our Clinic

Yukio Sato, Mitsuya Sakata and Masatoshi Okochi

1st Department of Surgery, Nagoya City University School of Medicine
(Director: Prof. K. Shibata)

Comparative study of the two methods, Whitehead' anoplasty and simple hemorrhoidectomy -i.e. Braatz', Milligan', Sarafoff, etc., based on long term results of 105 cases of hemorrhoidectomy were shown as follows;

- 1) Recurrence were lesser in the case of Whitehead' method.
- 2) Incontinence and mucous discharge due to a insufficiency of sphincter function were caused a little more in the case of Whitehead' method.
- 3) Symptom of analstenosis were seen a little more in the case of simple hemorrhoidectomy.

As a conclusion, selection of a proper method is of the first importance for hemorrhoidectomy. When the marked degeneration is found in sphincter muscle, Whitehead' method with sphincter plasty should be performed.